光井渉先生(美術学部・建築)が学生にすすめたい本

【重い座右の書】

「学生にすすめたい一冊、というテーマで何か書いて下さい。」

にこやかに微笑む図書館のUさんのお願いを、つい気軽に引き受けてしまったことを後悔している。

すすめたい本が見あたらないわけではない。ここ数ケ月に読んだ本だけでも、面白かった本、ためになった本などたくさんあるし、かつて読んだ本を思い返せば、それこそ無限にでてくる。しかし、そうした「今の私が面白いと感じる本」を学生諸氏にすすめるのにはちょっと抵抗を感じてしまう。

読み手のその時々の興味に沿って、本の評価は大きく左右される。「すすめられて読んでみたけどつまらなかった」とか「こんな本を面白いと思っているのか」と言づかれると立つ瀬が無い。そして何より、天の邪鬼な私は、どんな名著でもすすめられるとかえって読む気を失ってしまう、というのが抵抗を感じてしまう最大の理由である。

読書の面白さは、読むこと自体と同じくらい本を探すことにあるのではないかと思っている。本屋、特に古本屋の片隅で埋もれている一冊を見つけだす喜びは何にも変えられないし、結果として誰もが知っている世界の名著だったとしても、「自分で発見した本」を読むことが最高なのだ。

何だか飲み屋でくだを巻いているオヤジのようになってきたので、本題に戻る。じくじくと悩んだ結果、『国史大辞典』(吉川弘文館・全十七巻)を私のおすすめの一冊としよう。

題名をみてわかるように、これは本といっても辞典、それも日本史に限定した辞典である。発刊元の吉川弘文館は歴史の分野でたいへん著名な出版社で、その総力をあげて編集されたのがこの辞典である。ちなみに、本を選ぶのに出版社で選ぶという方法もある。建築なら彰国社、美術史なら中央公論美術出版といったように、各分野ではずれの少ない出版社というのがあり、それを知っておくと本を探す際に手助けとなる。

この辞典の最大の特徴は、徹底的な小項目主義を貫いていることにある。例えば、芸大絡みでも、東京美術学校・東京音楽学校・フェノロサ・岡倉天心・浜尾新など当然項目として掲げられているし、その他の主要な教官なども結構掲載されている。なんと東京芸術大学の項目では、取手キャンパスについても触れられているのである。

こうした小項目主義だから、「えっこんなことまで」といった類のものもちゃんと独立した項目となっている。だから、何か調べごとをしている時に疑問に思ったら、まずこの辞典をみてみると仕事がぐんぐんとはかどる。また、各項目の末尾には関連項目や参考図書も記されていて実に便利なのだ。

このように大変良い本であるが、一つだけ欠点がある。それは本の大きさと重さである。全十七巻を平積みにすると、その高さはなんと１１０センチにも達し、一巻でも立ったまま頁をくっていると、筋肉痛で手が痺れそうになる。

この辞典は図書館開架の奥に備え付けられている。私は研究室や自宅にも置いていて、平均すると毎日一回は開いているが、乏しい室内スペースをこの辞典のために空けておくのにはいつも苦労が伴っている。その意味でとっても重い座右の書なのである。